

- ★ 高温多日照が続き、葉令の進み以上に生育前進！
 ★ コシヒカリも平年より早く幼穂形成期に到達！

1 君津地域の生育概況

5月から続いた高温多照の日々により、これまで平年に比べて遅れ気味であった生育が今年は前進化しています。そのため、4月25日頃に移植した「コシヒカリ」についても、6月20日頃には幼穂形成期に到達していました。また、草丈や葉色はほぼ平年並みになってきていますが、茎数は植付時期が早いものは少なく、遅いものでは平年並みになっています。

今年の特徴として、4月中の低温の影響が残っており、4月上旬と下旬植えのものの幼穂形成期がほぼ同一の日になっています。そのため、今後の重要な作業である出穂期前後の防除や収穫についての適期についても、例年以上に幅が狭くなることが予想されます。水稻の生育を確認しながら、早めに準備する作業計画を立ててください。

2 生育調査ほの調査結果（幼穂形成期※早生：6月14日前後、晩生：6月20日前後）

品種		田植え日	葉令	草丈(cm)	茎数 (/株)	茎数 (/㎡)	単葉葉色
ふさおとめ (袖ヶ浦市)	R2年	4/16	10.9	58	31.6	506	39.3
	平年	4/16	11.3	58	42.9	654	42.9
	平年比	±0	-0.4	100%	74%	77%	92%
ふさこがね (木更津市)	R2年	4/23	10.0	51	20.9	396	40.9
	昨年 (比較)	—	並	並	少ない	少ない	並
コシヒカリ (君津市)	R2年	4/26	9.7	69	38.8	598	38.0
	昨年 (比較)	—	遅い	並	並	並	並
粒すけ	木更津市	4/21	—	63	29.5	536	38.2
	君津市	5/2	11.2	63	35.3	575	36.7

※平年値は過去10か年（平成22年～令和元年）平均値。ただし、「ふさこがね」、「コシヒカリ」は近年、調査ほ場の変更があったため、昨年と比較した生育進度（葉令は0.5、他は10%以上の差がある時に多い（少ない）等と記載）を記載しています。

また、「粒すけ」は令和2年度より一般栽培が始まった千葉県が育成した新品種です。ただし、木更津市のほ場は参考ほ場のため、簡略化した調査結果になっています。

-郵便で配信している方へお願い-

稲作情報の配信を郵便から、電子メールまたはFAXに切り替えを進めています。

電子メール・FAXをお使いの方は、下記までご連絡ください。

連絡先 宇津木 i.utsg2@pref.chiba.lg.jp 0438-23-0299（電話）

3 これからの管理のポイント

① 節水へのご理解とご協力を！

今年の梅雨は昨年に比べ、少雨の傾向が続いているため、渇水への対応が必要になる可能性があります。ただし、登熟期の水不足は、減収と、乳白米等の白未熟粒の発生による品質低下の原因になるので、かけ流し等には注意し、限られた水資源を有効に使うようにしましょう。

● 穂ばらみ期から出穂2週間後までは湛水管理

高温時の品質低下を防ぐために、この期間は田面が露出しないような湛水管理を行いましょう。

● 出穂2週間後～出穂25日後までは間断かんがい

米粒の充実と品質向上のために、出穂25日後までは、水が必要となります。

● 水位や用水の状況に応じて剤を選択

近年、使用が増えているジャンボ剤や豆つぶ剤は省力的な散布が可能ですが、5～6 cm程度の深水で無いと、有効成分が十分に拡散できず、効果が不安定になります。用水量が少なく、水が貯めにくい時には、粒剤や液剤等の散布も検討しましょう。

※三島ダムの水位低下による渇水への対応として、節水への御理解と御協力をお願いいたします。

② 斑点米カメムシ類の防除

斑点米カメムシ類は、水田周辺に生息していた成虫が水稻の出穂後に水田に侵入します。防除適期は、成虫飛来期である「穂揃期（出穂期から2、3日後）」と、水田に侵入した大型の斑点米カメムシ類成虫が産卵し、卵から幼虫が孵化する「出穂15日後頃」です。

大型の斑点米カメムシ類は、水田に侵入すると産卵し、成虫よりも幼虫による被害が大きく、乳熟期から糊熟期の吸汁によって被害が発生します。

カスミカメムシ類は、小さく発見しにくい害虫です。天候と生育の関係で登熟中の籾殻が開く（籾割れ・ふ割れ）と、開いた所等から吸汁し被害を与えます。出穂が、周辺よりも早いものや遅いものは、集中的な被害を受けることがあるので、特に注意しましょう。

また、出穂期前後の草刈りはカメムシ類を水田の中に追い込んでしまいますので、畦畔雑草は出穂2週間前頃までに刈り取り、出穂期を過ぎた後は、収穫期まで雑草が出穂しないように草刈りをしましょう。

③ 病害の防除

今年は、現時点では、低温や多雨条件が続いている状況ではないため、昨年よりも、いもち病や稲こうじ病の危険性は低いと予想されます。その一方で、高温で発病が助長される紋枯病については昨年よりも多発する可能性があるため、注意が必要になります。

○いもち病

止葉などの上位葉に葉いもちの病斑がある場合は、穂いもちに移行し減収するおそれがあることから、穂ばらみ期に治療効果のある薬剤で防除しましょう。さらに発生が続く場合は、天候等を考慮した上で穂揃期にも追加防除を行いましょう。

○稲こうじ病

稲こうじ病は穂ばらみ期が低温の場合や降雨が多い時に発生が多くなります。前年に多発したほ場では防除時期である出穂前に、薬剤防除しましょう。

○紋枯病

紋枯病は、莖数が多いと発生しやすくなります。また、紋枯病による葉鞘の枯れ上がりは倒伏を助長し、収量にも影響します。飼料用米品種でも発生がみられるので注意しましょう。防除適期は幼穂形成期から5～10日後で、穂ばらみ後期までに散布する必要があります。また、薬剤により、予防効果と治療効果のある剤があるため、薬剤の選択には注意が必要になります。